

## 修士論文概要

### 中国人日本語学習者の複合動詞習得に関する一考察 －複合動詞「～こむ」を対象に－

郭 宇婷 (GUO YUTING) (博士前期課程 2023 年 3 月修了)

単語がその構成から見て二つ以上の語彙的意味を持つ部分に分析できる語を複合語と言う。日本語には複合動詞の種類が多くあり、中級以上になると、読解や日本人との会話の中で頻繁に用いられるようになるが、日本語学習者にとっては習得が難しいとされている。したがって、複合動詞は学習者の利用率も低いことがわかっている(姫野 1999)。しかし、その習得の実態についてはまだあまり研究されていない。本研究では、学習環境の異なる上級中国人日本語学習者を対象として複合動詞の習得の状況を明らかにするために、日本語の複合動詞の中で最も生産性が高いとされる複合動詞「～こむ」を取り上げた。調査ではまず、松田(2001)のコア図式による「～こむ」の4つの意味分類に基づき、「複合動詞レキシコン」から高頻度語と低頻度語の「～こむ」計16語を取り上げた。そして、学習環境が異なる在日中国人学習者10名と在中中国人学習者8名を対象として未知/既知度の自己申告、単純動詞・複合動詞選択テスト、単純動詞/複合動詞の意味の違いに関する母語による説明の三調査を行なった。

調査課題は以下の4点である。

- ①複合動詞「～こむ」に関する学習者の未知・既知の自己申告、複合動詞選択率に複合動詞の頻度が影響を与えるか。
- ②複合動詞「～こむ」の認知度と選択率は、先行研究(松田 2002)の文産出テストの受容率と同じ傾向を示すか。
- ③複合動詞「～こむ」の既知率、選択率には中国語の影響が見られるか。
- ④上級中国人学習者は複合動詞「～こむ」の意味をどのように捉えているか。

調査課題①については、在中学習者においても在日学習者においても複合動詞既知率および選択テストの結果とも高頻度語の方が低頻度語より高かったため、学習者の「～こむ」の習得には複合動詞の出現頻度が影響を与えていることが示された。

調査課題②については、産出文の受容度から見た松田(2002)と異なり、学習者の認知度と理解度に基づいてデータを取った結果、松田(2002)の「～こむ」の4分類の難易度とは異なる調査結果が得られた。それはプロトタイプ理論から推測される難易度順と合致するものであった。

調査課題③については、在中学習者においても在日学習者においても中国語に訳したときに「～こむ」の意味と対応する「～進」「～入」「～深」「～沉」が付く「～こむ」の方が複合動詞の認知度、選択率とも高かった。このことから、母語の対訳がある複合動詞の方が中国人学習者にとっては理解しやすいことが示された。

調査課題④については、在日学習者は分析対象とした4つの複合動詞について適切な意味分析ができていて、比較的理解が進んでいることが分かった。しかし、在中学習者は4分類のうち「反復行為による状態変化」の用法については理解が難しい者が多いことが分かった。